

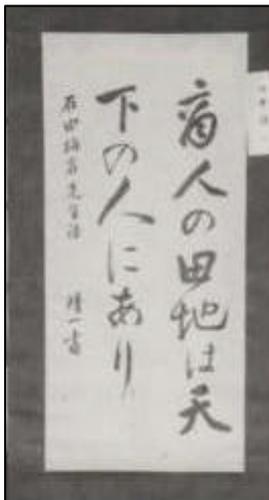
元心学明誠舎理事長 竹中靖一逝去時、妻 芳子が会誌「こころ」に寄稿した謝辞について  
—二人でともし続けた心学の灯と研究を偲んで—

2012.7.7

中尾 敦子記



靖一昭和44年頃  
習字を始めた頃、  
雅号は『素心』



父、竹中靖一は定年を過ぎても、近畿大学に奉職していました。79歳のある日、講義に出かけ学内で倒れ、救急病院から国立循環器センターに転院しました。腹部静脈瘤が肥大化しており、手術するには命の危険が伴うなどの説明を受け、手術するかQOLを下げ、静かな老後を在宅で過ごすかの二者択一を迫られ、在宅で余生を過ごす選択をしました。介護の手が必要で、大阪市内から娘中尾の住む吹田市に転居し、それなりに静かな日々が続きました。

靖一は、船場で浄瑠璃本版元『加島屋』の一人息子として、幼少期は何不自由なく育ちました。(同店については、神津武雄の『早稲田大学大学院文学博士論文が詳しい』)

しかし、近代化で消えて行く伝統的産業の崩壊の渦中に居ながら、京都帝国大学で英国経済学史の研究者としての道を歩み始めました。そこで、ラガー仲間の友人の妹、山田芳子と出会いました。没落商人の息子は、船場の典型的旦那衆の名残を濃く残す父親を抱え、山口高等商業専門学校(現在の山口大学)に赴任します。その後縁あって芳子との山口での生活を始めました。戦局の悪化で、広島陸軍参謀本部に経理将校として軍務につきました。当時は、生活の厳しさがまだ深刻でなかったのか、家族を連れての広島赴任でした。そこで原爆に遭遇しますが、全員事なきを得て、山口に戻ります。

戦後、進駐軍の指導下で突然教職から離れざるを得ない状況が生じ、大阪の鴻池家係累企業の重役として、実業界に在籍し生計を立てる事になりました。間もなく、地方大学などからも招請を得ようになり、近畿大学に奉職する事になり、心学、大阪経済史、大阪商人の研究などを再開します。研究者として経財界との関係も多忙になりました。

竹中の初期の研究論文などには、アダムスミスはじめ英国経済史関係の抜き刷りなどが多く見受けられます。しかし、昭和10年代の抜き刷りには、心学の経済思想についてのものを見つける事ができ、江戸期の経済思想史に早い時代から注目していたと考えられます。明治時代の心学明誠舎の主宰者の一人、山田俊卿のひ孫の芳子と意識せずして結婚したのでしょうか。偶然の結婚が、江戸時代からの貴重な資料でさらに強く二人を結び、心学の経済思想を紐解く必然につながっていったと考えるのはあまりにも私的な考察でしょうか。

靖一の最後は、ここに紹介する芳子の寄稿文の通りです。靖一の遺稿を整理し、研究する私は「因縁の糸」の不思議を感じます。

ところで、今も当舎に残る江戸期の書物や軸物は何処に保存されていたのでしょうか。大阪大空襲時、市内に存在していた明誠舎舎屋に残されていなかった事は、大空襲にあわないで今も残っている事実で明らかです。広島に持ち込まず、山口大学の官舎に残したと想像できます。戦後、マッカーサーの命令で突然の大学からの退去を迫られた混乱時に、これらの書物、父靖一の研究書、資料などをどのように保管し、運んだのでしょうか。

実業界に逼塞していた時代にも、いくつかの論考、依頼原稿などを残しています。傍らで父と母の往復書簡が二人の歴史を偲ぶものとして現存し、長姉靖子が私本にまとめました。苦節を乗り越え、完成した博士論文が学士院賞に輝いたことは、戦前・戦中・戦後を、他人が慮れないような夫婦の強いきずなど、心学に対する二人の熱い研究心が結実したと考えられます。

本稿にも記されていますが、竹中は心学研究のマウンドから予告なしに退却し、心学明誠舎運営はその後約20年間、苦難が続きます。その間、理事長職にあった別所俊顕氏はじめ、安倍亮介、山中浩之、故小堀一正、故作道洋太郎(敬称略)など多岐にわたる人々の応援に芳子は安堵し、85歳を過ぎても、毎回欠かさず聴講し、古くからの舎員を繋ぐ存在でした。娘の私が遅まきながらも継続的に活動を維持する姿を見届け、父竹中靖一の下に旅立ったのは、夫靖一が逝去して20年の歳月が過ぎていました。

それは、不肖の娘、私の学位論文が完成した 2005 年春の事でした。

『竹中靖一逝去時、芳子が寄稿した謝辞』

## 社団法人石門心学会会誌「こころ」第 132 号

昭和 62 年 9 月 30 日：発行

昨年十二月十九日、竹中靖一死去の節は、石川松太郎様が通夜に御列席下さいまして、又、翌日の葬儀には田辺肥州様ならびに小山止敬様御来阪頂きまして、皆様御遠路のところ誠に有難く厚く御礼申し上げます。石門心学会にも又心学参前舎にも長い間御世話になりました。何の御恩返しも致しませず恐縮して居ります。唯唯皆様のご厚誼のほど有難く感謝致して居ります。

竹中は、昭和五十九年十二月勤務先で倒れましてから二年間、大した老人性痴呆症もなく、これがせめてもの幸いでしたが、唯、安静にしているのが最良の務めと解釈する、所謂明治生まれの消極的な病人となり、自分から病気に打ち勝とうという気分に欠けて居りました。今日の医学では、宅のような軽度の脳梗塞でしたら、その初期にリハビリをすれば、もう少し病の進み方をおくらせる事が出来るそうです。ところが折しも折、私自身胃癌で手術という羽目になりまして、老人二人暮らしの如何とも致し方なく、只今住んで居ります二女の家庭に同居を余儀なくされました。その後、おかげ様で私の方は早期発見で早々と治療しましたが、急に老人二人の病人を抱え、その上三十年来住みついた大阪市内より、この吹田に引越すという作業もありまして、老

父のリハビリも十分というわけにもいかず、手足は益々弱ってまいり、内臓は比較的丈夫でありましたが、全体の機能が日一日と衰えて、終局に近づいて行ったようです。生ある限り必ずその終わりへと歩いていくという事を、如実に知らされたことでございます。

さて、竹中と石門心学との関係は、昭和十年以後の事となります。私の曾祖父・山田俊卿が現在の大阪市立弘済院の前身である弘済会に引き継がれた、大阪慈恵病院の医師でしたが、老年になり、心学の道に入り、明誠舎のお仲間にも入り、多少書物を集めていました。その没後、竹中が整理にたずさわっている中に、心学の勉強をさせて頂くようになりました。諸先輩各位の御指導の賜物でございます。

そして社団法人心学明誠舎の仕事も、覚束ないながらもする事となりました。再発足の明誠舎は、昭和三十年より二百九十七回の例会を続けて来ました。竹中は、三百回になったら止めようと思いましたが、それは後継者を作る事が出来なかった事もありまして、残念ながら限界を考えていたようです。専属の事務担当者がいないので、何かと手落ちがあったことと存じ、到りませんでした事をおわび申さねばなりません。

初代理事長の田中良雄様は、明誠舎を始めるに当り、何回も何回も心学について、議論をかわされ、ようやく発足に踏み切られたという慎重なお方の方でした。次の竹田義藏様は「折角、心学という名があるのだから、そのものずばり、心学の講義をするように・・・」と御希望でした。それで心学の書物の中から石田先生事跡とか都鄙問答より文章

を抜き出して、講話の内容として居りました。

このように、石田梅岩とか石門心学という言葉を知っている人はさておき、それ以外の人々には、心学という文字が耳慣れないのだと思います。明治・大正の頃ならば、心学といえはすぐに、或は倫理、道德、修身という風に判ったのでありましたが、昭和の時代では「心学明誠舎」に興味を持って「一度いってみよう・・・そして翌月は来ない」という人が概ねで、それはそれでよいと、私共は考えていました。そして毎月例会には、二十人乃至三十人の出席者がありました。

竹中が倒れたのち、昭和六十年は休会していましたが、昭和六十一年に入り、熱心な聴講者の方々が、あれこれと考へ、手を尽くして、各方面の先生方に御相談をして頂きました。

そして、現在、御骨折り下さっている大阪大学文学部教授の加地伸行様が、心学明誠舎の趣旨を御理解下さり、まず二、三年やって見ようという事になりました。その時「心学明誠舎は滅びないと思います」と誓うように言われた言葉が、そばで車いすで聞いていた竹中には解ったか解らないか・・・。私には、今もありありと刻み込まれています。昭和六十一年八月の末でございました。

それより明誠舎は「心学の会」として五回開かれて居り、少々変わった形ではありますが今後とも続く事と存じます。三十人程度の席は、いつも満杯で、私もその一人として拝聴させて頂いて居ります。

竹中 芳子